

茂木経済産業大臣 年頭訓示

新年明けましておめでとうございます。

安倍政権が発足して、丸1年を迎えます。そして、私も経済産業大臣として、2度目の正月、新年を迎えることになりました。昨年1年間を振り返ってみますと、日本経済、長引くデフレからの脱却、そして過度な円高の是正、こういったものが進み、株価の方も1年前分の8,000円台から今は1万6,000円を伺う状況になっております。そして、経済の成長率も4四半期連続でプラス、まさにこの1年で日本経済、マイナスからプラスに大きく転換し、そして、アベノミクスの効果が発現しつつあると考えております。

昨年の臨時国会におきまして、産業競争力強化法成立をいたしました。今年は日本経済の三つのゆがみ、過小投資、過剰規制、そして過当競争、これを確実に、そして大胆に是正していく、こうした年にしたいと考えております。

今日午前中から午後にかけて、幾つかの団体の新年会、挨拶をしてまいりました。いずれの新年会も大盛況でありました。去年よりも人数が多いな、こんなことも感じたところではありますが、年末の冬のボーナスも増えた会社、多いようであります。

ちなみに、日本で最初にボーナスを出したのは、三菱グループの創始者、岩崎弥太郎だったそうであります。ボーナス、起源をたどりますと、さらに古くて、古代ローマの成功と報酬の収穫の神「ボヌス・エヴェントゥス」から来ている。「成功と収穫」であります。まさに企業収益の改善、これを賃上げ、所得や雇用の拡大につなげ、それが消費の拡大になり、そしてさらなる投資や生産を生む、こういった好循環を着実に作り上げて、景気回復の実感、これを全国津々浦々に届けていきたい、こんなふうに考えているところであります。

昨年は、2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催が決まりました。ちょうど今から50年前、1964年に東京オリンピック開催をされたわけでありまして。当時日本は、高度成長期、テレビ、冷蔵庫、洗濯機と、こういった三種の神器の普及が大いに進みました。

ちなみに、日本で最初にテレビが売り出されたのは1953年ですから、その10年ぐらい前でありまして。当時のテレビ、今の価格にすると680万、こういう高額の商品でありまして、しかも奥行きが56センチある、こういうものであったそうです。そして、そこに映し出された「オバケのQ太郎」、原作で言いますと、毛が3本ではなく10本あったそうです。

それはともかくといたしまして、さらにそれより前、世界で最初のブラウン管に映し出された画像機、これはアニメでもそして英語の言葉でもなくて、「イロハ」の「イ」の字でありました。カタカナの「イ」の字でありました。今年は、この「イ」を「イロハ」の「イ」から「イノベーション」の「イ」に変えていきたい。さまざまな分野でイノベーション革新、変革が起こり、その相乗効果で日本が好循環に入る、そういう年にしていきたい、そんなふうに考えております。

来るべき国会も「好循環実現国会」ということで、それぞれ我々として提出をする法案、しっかりと成立をさせていきたいと考えております。

そして、さまざまな分野、所掌の分野でイノベーションを進めてほしいと考えております。

まず第一に産業のイノベーションと新陳代謝の促進であります。産業競争力強化法、そして新たな減税措置、フル活用して、前向きな投資、そして企業行動を促し、これまでにない産業再編、そして事業再編を進めていきたい、こう考えております。

次に、中小企業のイノベーションであります。ものづくり補助金、これも1,000億から1,400億に拡大、そしてまた拡充をすることができました。開業率10%、黒字企業倍増、更に海外展開1万社、こういった目標に向けて、草原の馬のごとく駆け抜けてほしいと思っております。

そして、昨年の小規模企業活性化法、それを今年は基本法につなげる、こういう思いで取組をしてほしいと考えています。

三つ目は、国際展開のイノベーションであります。昨年打ち出しましたインフラ・システム輸出、そしてクール・ジャパン戦略、新興国戦略、さらには世界最高レベルの知財システム、そしてTPP、そして日EU・EPA、さらにはRCEP、日中韓、さまざまな経済連携協定、今年に国際展開戦略、それぞれの分野でこれを実行元年の年にする、こういう思いで取り組んでいただきたいと思いますと思っております。

さらにエネルギーのイノベーションであります。エネルギー政策については、3・11以来の新たなエネルギー制約の中、早急にエネルギー基本計画を取りまとめる予定であります。その中で、実現可能かつバランスのとれた新たなエネルギーの需給構造の実現を目指していきたいと思っております。同時に、現在のエネルギー制約の中でそれを克服していく中で、大型の蓄電池の技術、更にはエネルギーマネジメント、電力システム改革、メタンハイドレート開発、こういった日本のエネルギーの新しいフロンティアを拓く、こういう年にしていきたいと考えております。

また、先月の20日、原災本部で決定し、そしてまた閣議決定を行いました福島復興の加速、そして廃炉・汚染水対策、これを着実に進めていくことは、政府全体としての最重要課題であります。資源エネルギー庁だけではなくて、全省で最大の使命感を持って、この課題に取り組んでいきたいと思っております。

昨年末にまとまりました来年度の予算案、経済産業省の予算は1兆2,137億円、これはリーマンショックのときの平成20年以来の1兆2,000億円台ということになりました。前年度比1,000億円以上の伸びということでありまして、この増加は2001年に経済産業省が発足して以来の最大の増加額となったわけでありまして、それだけ現在、我が省に対する期待、そして我が省が担うべき責任は大きい、そんなふうに考えております。予算は、単に確保するだけではなくて、いかに有効に使っていくか、執行していくか、これが何よりも重要であります。一日も早い予算の成立に向けて全力を尽くす、そして成立後は速やかな的確な執行を図っていく、このことが必要だと思っております。

年末年始、何らかの機会でベートーヴェンの「第九」聞かれた方もいらっしゃるんじゃないかなと思います。1万人の「第九」、これを指揮しました佐渡裕さん、こんなふうに語っています。「オーケストラに100人いたら、技量が飛び抜けた人、そうでもない人などいろいろいる。彼らをどの輪の中に入れるか。突出した人たちが入っている輪かレベルの低い人たちの輪か。僕は突出した人の輪を押し広げ、みんなを入れたい。」。そして

もう一つ、「そもそも人の個性はばらばら、バックグラウンドや考えていることも違う。音楽の場合、違う者同士が本能的に共感し、共振する。そこに感動が生まれる。何も刺激がないようにまとまるのはおもしろくない。」。全くそのとおりだと思います。そして、音楽とオーケストラを経済産業省に置き換えても同じことが言えると思っております。8,000人の職員、一丸となって、この1年、刺激と感動と共感の年をつくっていきたいと思っています。一緒に頑張りましょう。

(以 上)